

『ローマ散歩』のテキストをめぐって（論文要旨）

白田 紘

日本スタンダール研究会編の論文集『スタンダール変幻』（慶応義塾大学出版会発行，2002）に標題の論文を寄稿した（309～339ページ）。以下はその要旨である。

スタンダールの『ローマの散歩』*Promenades dans Rome*（1829）は，初版刊行後，著者の死後の1853年に，スタンダールの遠縁にあたり，かれの遺言執行人であるロマン・コロン Romain Colombによって〈完全版〉と称する第2版が出版された。この版は，スタンダールの自家本に書き込まれた訂正や指示をもとに，大幅な改訂を施している。以降の『ローマ散歩』はこの新版のテキストを多かれ少なかれ視野に入れて編集せざるをえない状況になった。

しかしヴィクトル・デル・リット Victor del Litto は編者による改訂に異を唱え，1973年に編集したプレイヤード版『イタリア紀行文集』*Voyage en Italie*のなかに収録した『ローマ散歩』で，「唯一の科学的方法であるように思える」として，初版でスタンダールが活字にしたままの姿でテキストを提示することにし，自家本の訂正や増補は註のなかでヴァリヤントとして示すことにした。しかし，プレイヤード版もこの新版つまりミシェル・レヴィ版の〈桎梏〉を免れることはできなかった。

まず，ミシェル・レヴィ版とはどのようなテキストなのか。先に記したように，のちにセルジュ・アンドレ本 *exemplaire Serge André* と呼ばれるスタンダールの自家本の書き込みに基づき，数多くの訂正をほどこし，さらには大幅な増補を行なっているのだが，これらは内容の補足よりも，別な独立した内容を，有機的でないままに提示している。しかし問題は削除にあるように思われる。こちらには，スタンダールの意図よりも，『ローマ散歩』をよりまとまったものにしようという編者の意図が感じられる。テキストのなかでの繰り返しを避けようとするばかりか，時にはスタンダールの別の著作のなかで記された事柄をも排除している。そこには〈完全版〉を目指す編者の並々ならぬ姿勢が見られる。

こうした対極にあるのがプレイヤード版である。しかし初版のテキストを提示するとはいえ，スタンダールには無頓着な誤りがあり，年代，固有名詞，数字，綴字など訂正すべき点があり，当然これらの訂正は行なわれている。しかし初版に付けられた正誤表で訂正されている事柄が無視されていたり，さらに，初版には見られない誤植ないしは誤り，脱落と考えられるものがある。これらの誤りや脱落のなかにはミシェル・レヴィ版で発生した誤りや脱落を引きずっているものが多くある。プレイヤード版は巻末の註で，丹念にヴァリヤントをあげているが，こうした註に表われないところで，ミシェル・レヴィ版の訂正や，反対に誤りを受け継いでいる。これが「ミシェル・レヴィ版の〈桎梏〉」と筆者が呼ぶものである。